

タイの高等教育機関の日本語教師の異文化間協働
—日本人教師の意識変容に着目して—

山本由美子
タマサート大学 教養学部
ポラニー ピナンソツティクン
タマサート大学 教養学部

要旨

本研究はタイ国の大学において日本語を教えている日本人教師の異文化間協働に対する意識変容の実態を解明したものである。日本人教師3名にインタビューをし、ナラティブ手法によって語りから個々人が持っているタイ人教師との協働の実践経験、問題点、対応の仕方、理想像を抽出した。その結果、以下の点が明らかとなった。

- 1) 日本人教師は異文化間の衝突をして継続的な関わり合いを通して乗り越えるという理解するためのプロセスを踏む必要がある。
- 2) 日本人教師にとってよい協働、つまり理想に近い協働を実現するためには対等な関係で話しやすい双方向の協力を提供する現地の相手が望まれている。
- 3) 理想的な異文化間協働の状態を成立させる場合は、相手の協力や当事者間の関係だけでなく、協働文化を育む良好な人間関係が築かれた職場環境も重要な構成要素となる。

キーワード: 協働、異文化、日本語教師、タイ、意識変容

Cross-Cultural Collaboration among Japanese Language Teachers in Thailand: Focusing on the Native Teachers' Change of Views

Yumiko Yamamoto

Faculty of Liberal Arts, Thammasat University

Poranee Pinunsottikul

Faculty of Liberal Arts, Thammasat University

Abstract

This article presents the results of a study on Japanese native teachers' change of views toward intercultural collaboration during their time of working at a university in Thailand. Three Japanese native teachers were interviewed. The narrative analysis was used to extract each participants' collaborating experiences, collaborative problems, problem handling methods and concept of ideal collaboration through their autoethnography. The results clarified the following aspects.

1) Native teachers need to go through the process of cross-cultural understanding by letting conflicts arise and overcoming them with a long ongoing involvement.

2) To have a successful collaboration, a local partner who is easy to talk to and treat native teachers equitably is desirable.

3) To achieve the most ideal form of cross-cultural collaboration, not only the cooperation of the partner but also a healthy work environment that promotes collaborative culture is an important component.

Keywords: Collaboration, Intercultural, Japanese Teachers, Thai, Change of Views

1. はじめに

日本語母語話者教師が、海外の日本語教育機関で仕事をする際に、現地の教師との関わり合いを全く持たずに仕事を遂行することは不可能であろう。関わり合いの程度の差はあれ、何らかの形で現地教師と関わり合いながら仕事を遂行していくことは避けられない現実である。従って、日本国内から海外の教育機関へ移動する日本語母語話者教師は、移動に伴うさまざまな環境の変化の一つに同僚の中に現地教師が含まれることに対して何らかの心構えのようなものを持って現地に臨むのではないだろうか。

タイの日本語教育現場においても、タイ人教師と日本人教師が多種多様な形で関わる必要があり、それぞれの教育機関や担当する科目によって実際の関わり方が違う。チーム・ティーチング¹のような形態で同じ科目を担当するなどの接点があればそれほど深く関わる必要はないが、同じ科目、同じ学生を担当するような場合はかなり密接に関わる必要が出てくる場合もある。筆者らは、大学で日本語を教え4年間同じ科目をチーム・ティーチングで担当してきた。数年のチーム・ティーチングの過程で、日本人教師とタイ人教師の関わり合いの変化とそれに伴う実践の著しい変化があり、それらの変化が筆者らの本研究へのきっかけとなった。

本研究はタイの異なる高等教育機関に所属している日本人教師の語りを通して、タイ人教師との関わり合いの変化という側面から実践における異文化間協働の実態を見出すものである。平畑(2014)では、国際交流基金による調査から、世界のすべての日本語教師の中で母語話者教師の占める割合や地域別に見た母語話者教師の比率、さらに各地域の教育機関別母語話者教師の比率を提示したのちに、「海外の教育現場で活動する母語話者日本語教師たちの実情について、明らかにされていることは非常に少ない(p.18)」と述べて

いる。そして「彼らはどのような理由で日本を離れてそこに行き、そこでどのように日本語を教えているのか、正式に調査されたデータはなく、把握されていないことが多い」と言う。

日本人教師がタイで働くことを選んだ理由は様々であり、現場でタイ人教師とどのような形態で教えているのか、どのような連携の元で授業が行われているのか、教え続ける中でどのような変化があったのか、そのことが今の自分にどのような意味を与えているのかは、人によって異なるだろう。本研究では、異なる教育機関に所属する3名の日本人教師に、タイに来ることになったきっかけや理由に始まり、今に至るまでの経緯を、実践でのタイ人教師との関わり合いに焦点を当てて語ってもらった。そして、語りに表れた意識変容の部分に着目し、協働という観点で考察した。日本人教師のタイにおける異文化間協働について考察することは、今後、タイに限らず海外の日本語教育現場にも示唆を与え、さらに日本国内、海外を問わず多様な文化的背景を持つ者で構成され、業務を遂行する仕事場面における協働を支える環境づくりを考えるうえでも意味があるのではないかと考える。

2. 本研究に至る経緯

本研究は、A大学で筆者らが担当した「初級日本語会話授業」におけるタイ人教師と日本人教師の3年間の実践での関わり合いの変化に注目したことから始まった。協働という観点からその関わり合いの変化について述べる。

2016年から3年間、筆者らは「初級日本語会話授業」を担当した。各教師の担当内容は、タイ人教師が聴解を担当し、日本人教師が会話を担当するという形であった。1年目の筆者らの関わりは同じクラス、同じ学生を教えていたにも関わらずほとんど互いの授業について話すことはなかった。もちろん試験や学期末の成績会議では顔を合わせるが、深く内容に入り込むことはなく、学生の情

報や様子も共有できなかつた。いわゆる、完全な役割分担と言えよう。

2年目に入ると、役割分担は継続されたが、徐々に授業内外で話す機会が増えてきた。授業については、内容の提案や報告、授業外では仕事上の悩みなどを話すようになり、1年目よりは互いの授業に関心を持つようになった。

3年目に入ると、すべての授業や活動を共有するようになり、毎回の授業について相談したり、授業後に報告したりするようになった。さらに踏み込んで、互いの教育観まで話し合うこともあった。そして、そうすることでさまざまなメリットがあった。具体的なメリットとしては、テキストの見直しにより、学習目的や達成目標が明確になったことでテーマの設定や流れが変わったこと、また、学生の話すことへの動機付けの一つとして企画した日本人母語話者とのインタビュープロジェクトを協働で行うことにより、より多彩な活動ができたことなどが挙げられる。

以上が本研究に至った経緯である。この経緯の中で、筆者らは他の教育機関でのタイ人教師と日本人教師の関わり合いや実践における協働について関心が高まっていき、実態を調査したく本研究に至った。

3. 日本語教育における異文化間協働

館岡(2005)によると、「協働」とは「互いに協力して何かをつくりあげる創造的な活動を行うこと。ひとりではなしえなかつた創発が起きる」(p.96)と定義されている。そして、協働が起きることを目指した学習を「協働学習」と呼んでいる。「ピア・ラーニング」とも呼ばれ、「ピア・リーディング」「ピア・リスポンズ」もそれに位置づけられる。ピア・ラーニングには狭い意味での学習目的と広い意味での学習目的があり、狭い意味での目的は「作文や読解などの課題を遂行する」目的、広い意味での目的は、「仲間といっしょに学ぶことによって人と人との社会的な関係を築くことを学び、さらには自分自身に気づき自分

自身を発見していく」(池田・館岡,2007,p.51)とされている。

タイの日本語教育現場における日本人とタイ人の協働に関する研究は多く存在する。タイを例に海外での日本語母語話者教師として求められる資質をまとめた佐久間(1999)をはじめ、日本人教師と現地タイ人教師の教師観や協働観を調べたものが多く行われてきた(池谷他,2012; 香月,2011; 香月・松尾, 2017; カノックワン他,2017; 中山,2016; 中山他,2017; 古別府,2008; 古別府,2013; 吉田・芝崎,2009など)。教師のある時点での意識の態様を明確にしたものがほとんどだが、教師の意識の変容の実態に関して着目したものの数はまだ限られている。

本研究では館岡(2005)の広い意味での「協働」を捉え、日本人教師にとっては、母国を離れたタイでタイ人教師と共に授業や授業外活動を行っていくことは社会的な関係を築いていくことになると考える。自分自身に気づき自身を発見していくプロセスの中で、日本人教師にはどのような体験があり、思いがあり学びがあったのか、それぞれの語りから抽出していく。タイの大学で日本語を教えている日本人教師がタイ人教師との関わり合いや関わり合いの変化をどのように捉えたのかに焦点を当て、異文化間協働に対する意識変容の実態を明らかにすることを目的とする。

4. 調査概要

4.1 調査方法

本研究は調査協力者の長年経験をしてきた仕事に対する考え方の変化の経緯を見出すために、質的データが収集できるインタビュー調査を行うことにした。中山(2016)が指摘したように、量的調査と異なりインタビューされることによって調査協力者は自身の協働への理解が促進されることになり、その理解を深めることになる貴重な機会につながると考えたからである。

データ分析方法は、先行研究ではPAC分析² (池谷他, 2012など)やSCAT³ (中山他, 2017など) という分析手法を用いたものが多かったが、本研究はライフストーリー研究によく使われるナラティブ分析⁴の手法を取ることにした。ナラティブとは、調査協力者の「語り」に注目する質的研究の手法の一つである。インタビューの現場には、語り手と聞き手がおり、語り手は聞き手の問いに対して自らの過去を振り返り、経験を再構成していき、そこに新たなストーリーが生まれる。聞き手は語り手がストーリーを意味づけたりさらに展開していくときの「ことばの協働的な構築者」(嶋津, 2018, p.61)である。この方法について平畑(2019, p.166)は、ある種の危険性が潜んでおり、その危険性とは、聞き手の主観による語り手の解釈とのずれであると指摘する。しかし、主観的な解釈こそが「質的研究の豊かさの源泉であり、これを排除することはできず、排除する必要もない。その一方で、その危険性について、研究者は常に敏感かつ謙虚でなければならず、たゆまぬ自己批判を続けなければならない」と述べている。

筆者らは、研究者としての傲慢さが表出することに細心の注意を払いデータと向き合いながら、ナラティブ分析を行った。なぜこの方法を使用したかという、語り手の語りからでなければ現れないもの、感じ取ることのできないものがあると考えたからである。矢崎(2016)は、ナラティブを分析することを「私たちの「生」そのものを分析することと考えてもよい」と述べている。語りから生まれるものを注意深く読み取っていくナラティブ分析の手法を取ることは、人生のある時期、タイを選び、タイで生きる日本人教師たちの、タイ人教師との関わり合いの中での「生」そのものを読み取ることと考えたからである。

4.2 調査協力者及び調査の流れ

本調査ではタイの異なる大学で常勤講師として日本語を教えている日本人教師女性3人を対象に、インタビュー調査を実施した。この3人を選んだ理由は、3人とも日本語教師としてのスタートがタイであったことと、日本語教師経験が一定の期間(5年～10年)あったこと、さらに、インタビューという性質上、インタビュアーとのラポールが形成されていることが必要な条件と考えたからである。

表1 調査協力者

協力者	年齢	調査時点までのタイでの滞在期間	調査時点の教師経験期間	調査日	調査形式
A	30代前半	5年	5年	2019年10月	対面
B	40代後半	16年	10年	2020年10月	対面
C	30代前半	9年	9年	2020年11月	online

インタビュー実施時間はそれぞれ60分～90分程度であった。事前に、メールでタイ人教師との協働について調査することの趣旨を伝え、インタビューへの協力を依頼した。その際、「調査協力依頼書」も添付し、倫理面への配慮を行った。協力者の同意が得られた後インタビューまでの間に、質問予定項目を記載したシートを調査協力者に見せた。インタビューを通して得られた語りはすべて録音し、文字化したものを協力者に見せ、確認してもらった。

5. 調査結果と分析

各協力者のそれぞれの語りのデータから、タイに来るきっかけという出発点、時間経過に伴う意識の変化、それに関わる要因、現時点の考えを見出すために、以下の5つのカテゴリーに相当する部分を抽出し分析していく。

- ①なぜ日本語教師として教える場にタイを選んだのか
- ②タイ人教師と仕事をするにどんなイメージを持っていたか。
- ③最初の頃のタイ人教師との関わり
- ④タイ人教師との関わり合いの変化
- ⑤理想のティーム・ティーチング⁵

5.1 Aさんの語り

5.1.1 Aさんの語りの分析

- ① なぜ日本語教師として教える場にタイを選んだのか——家庭環境から来るタイ人への好印象

父がタイが好きっていうのもあるし、タイ人の高校生がうちにホームステイしたっていう経験もあったと思います。タイやタイ人に対してすごいいい印象があって、それがなんか、笑顔で、その何ていうんですかね。あまり人間関係で悩まなくてもいいというのがあって、あまり深く考えてなかったのかなと思います。

Aさんは、X大学で働く日本語教師であり、日本の大学院を修了した年にタイに来た。いわば、日本語教師として初めての実践の場がタイであった。実家でのホストファミリーの経験によるタイ人への好印象から、タイで日本語教師をスタートさせることにし、不安はなく前向きに捉えていた。

- ② タイ人教師と仕事をするにどんなイメージを持っていたか——密な関係を築かなくてもいいというイメージ

(オーストラリアでは)現地外国人の先生と日本人の先生が仕事を分担されていて、【中略】仕事ははっきり分かれているような感じで、それぞれの先生が自由にやっているというイメージだったんですね。なので、そこらへんの…関わらないといけないから頑張らないといけない、いい関係を作るために頑張らないといけないという雰囲気があまり感じられなかったっていうのもあると思いますし

Aさんは、大学院時代のオーストラリアでの実習のときの状況を語ってくれた。来タイ前から、X大学での同僚日本人教師とLINEでつながり、タイの生活などの相談をしていたことから、タイ人教師との関係よりも日本人教師との関係構築のほうに意識が向いていた。

その日本人のLINEのグループに入れてもらって、生活のこととかを聞いてたので、あまり、その…なんていうんですかね、あまりタイ人の先生と関わることはないのかなっていう…印象ももったっていうのもあると思います。

- ③ 最初の頃のタイ人教師との関わり——自分への無能感からのストレス

本当に授業の直前とかにぱっと思いつかれて、こういうことをしたいと言われると、こっちは1年目だったのでパニックというか自分がこういうことをやろうというのをめちゃくちゃ長い時間をかけて準備してて、オッケー、じゃあ次、授業だ授業だと思ってるときに、全然違うことをしたいと言われると、正直頭が(笑)余裕もなかったんだと思います。【中略】けっこうストレスでした。

Aさんは、初年度、初級聴解会話クラスを担当した。同じく担当教師に同僚日本人教師とタイ人教師がいた。実際の授業は、1人で担当していたが、授業の内容やテストなどほとんどのことを3人で話し合わなければならず、Aさんはタイ人教師との関係にかなりの戸惑いや葛藤を感じ、ストレスを抱えてしまう。

タイ人の先生もすごい目上の方でベテランで、すごい人生の経験もあって、あんまり反抗というか、「できません」とか、「それはちよつと違うと思います」とは言いにくい【中略】やっぱり自分にも余裕がなかったし、その先生のことよくわからなかった。

日本語教師としてスタートしたばかりの頃のAさんは、教師としてベテランのタイ人教師が授業直前に、しかもこちらの準備がすでに終わっている段階で、突然提案をしに来ることに対して否定的な言葉で対応することはできなかった。タイ人教師の考え方や行動について理解できなかったが、何もできないという自分の不甲斐なさに無能感からストレスを感じていった。

④ タイ人教師との関わり合いの変化——タイ人教師への理解の深まり

Aさんは、その後、しだいにタイ人教師の性格や考え方、例えば、提案の背景には学生への期待や日本人教師への期待があることや、彼女の仕事のやり方を理解していった。同時にタイ人教師の突然の提案に対する対応の仕方を学んでいった。相手の立場や思いを理解する余裕が生まれたことがわかる。

(タイ人教師は)やりたいことがいっぱいあって、たぶんなんていうか、思いついたら言いたいっていうか、元々の性格？すごい、大学をよくしたい、学生をレベルアップさせたいって、めちゃくちゃ強い気持ちがあつて、どんどんアイデアが浮かぶからどんどん出していつてる印象で、それを自分がやらないというか、日本人の先生にやってほしいっていうことがあつて、たぶんネイティブにしかできない、ネイティブにやってほしいことがあつて、それは自分にはできないから、たぶんどんどん提案してアイデアを…私たちもちろん応えたいんですけど、【中略】「そうですね。そういうのもいいですね」と言わないと終わらないから(笑)すみません、何ていうか、とりあえず3人ともアイデアを出しやすい環境にあつて、やるかやらないかは別問題という態度を取ってチームティーチングしていたと思います。

(ストレスが)全くないわけじゃないけど、1年目よりも上手くストレスをという感じで。逃がしながらというかなんて言うか、タイ人の先生がやりたいことがある、それを日本人の先生がやるかどうかという、そういう相談は何度かあつたって思うんですけど、1年目と違うのは、自分で判断できるようになったことと、タイ人

の先生にこういう言い方で返せばタイ人の先生も悪く思わないかなっていう、タイ人の先生との付き合い方が、たぶん1年目よりはわかったので、何となくうまくできたんじゃないかと思います。

Aさんは2年間勤務の後、いったん本帰国したが1年後に大学に復職し、再び同じタイ人教師と同じ授業を担当することになった。その際、タイ人教師への以前とは違う自分自身の対応力の変化にも気付いた。

⑤ 理想の टीम・ティーチング——対等な関係で意見交換や共感できる相手とならできるかも

Aさんは2回目のチーム・ティーチングを経験した際、タイ人と日本人の役割分担を明確にして互いの授業内容を知らなくても授業に影響はないことを実感したが、今度は逆に、日本人とタイ人の持つ利点を活かしていないという不足感を併せ持つようになった。

なんか、お互いの良さを生かしきれてないという感じがしなくもないというか。タイ人の先生が入るのは学生にとって安心とか、初級だし日本語の説明ではしにくい部分も、タイ人の先生からやってもらうことで、安心してスムーズに導入できて効率よくとか。本来の目的はそうだったかもしれないですけど、二つにパカって分かれちゃってあんまりという気もしなくはないというか、何だろうな……

Aさんにとっては、ストレスなく働くということよりも、互いに話し合える関係性を築いた相手と協働で授業を作っていくことのほうに意義を感じることがわかる。

理想は一つの課を二人でやって、学生の様子はタイ人の先生がよくわかるし、相談もタイ語でできるから。で、日本人では、こういうことができるっていうのが……そういうバランスと連携がとれたらそれが理想だなと私は思いますけど、

しかし、それは一緒にチームを組むタイ人教師にもよると言う。

その先生(担当したタイ人教師)とするならするで、折り合いつかない部分があることがわかってるから最初から分かれてやりましょうということが、最初の部分で相談できてお互いストレスがないという……そのどうしようもない部分はお互いさまだと思うので、分かれてやるのが一番いいと思うんですよ。でもそうじゃない先生、話しやすくて意見が言いやすくて、共感がしやすい先生とだったら一緒に会話とか作文とかやってみたいなっていうのは思います。

Aさんは、チーム・ティーチング相手を含めてチーム・ティーチングを支える職場環境について言及する。Aさんは、周りのタイ人教師の日本人教師に対する態度に対等な関係性を見出す。具体的には、自分の都合や意見が言いやすく、それを受け入れてくれるところである。知識や経験によるヒエラルキーのないところに居心地のよさと、感謝の気持ちを抱いている。

こんな(自分は)経験ないのにすごい。なのに、対等に意見を聞いてくれるし、仕事があまりに無茶なスケジュールだったりするとそれについて言ったりできる。日本ではあんまり考えられないっていうか。上司にやれって言われたら、しゃあないやるしかないよう

な感覚ですけど、ここの職場ではその部分も折り合いつけられる。【中略】タイ人の先生のスタンスとしては「どう思いますか」とか「お願いできませんか」とか、こっちの都合も聞いてくれるような感じで、なんかまあ、今、締め切りが短すぎるとか急にスケジュールが変わったりとか何やかんや文句はあるんですけど、最初の入りの際は、そう言ってくれるからこそ自分の意見も言えてるので、自分の意見が言いやすい環境というのはすごい居心地がいいというか、ありがたいと思ってます。

5.1.2 Aさんの語りからの考察

Aさんは、来タイ直後の1年目のチーム・ティーチングで、協働経験がまだ浅かったこともあり、まだ異文化理解が生じにくく、タイ人教師の行動にパニックに陥り、かなりのストレスを抱えることになった。しかし、時間が経つにつれて、タイ人教師の性格や行動の背景にある思いを理解するようになった。また、Aさんは役割分担という形態は、ある意味ストレスは軽くなるが、互いのリソースを活かすきれないことに気づいた。Aさんがチーム・ティーチングに期待しているのは、一緒に話し合いながら授業を作っていくことである。共に働くタイ人教師と対等な関係で意見が言え、互いの意見に耳を傾けられ、共に授業を作っていくことである。また、Aさんは、職場での自分の位置づけや周りのタイ人教師の自分への対応から日本とタイの職場環境の違いにも言及している。上司と部下という関係ではない対等な関係で関わってくれるタイ人教師に、Aさんにとって日本ではなかなか経験できない理想の職場文化を実感したと言えよう。

異文化間協働では、最初は分からないという不安を回避しにくいものである。ある時期の異文化間の衝突や深いコミュニケーションを通して理解するプロセスを踏むことで協働が生まれる関係性を築けるようになると言える。この点では中山(2016

)の結果と一致するものと解釈できよう。ただし、日本人日本語教師は3年目から充実した協働に入っていける可能性があると言われているが、本研究の結果に基づいて述べると、そのような結論をまだ出しにくいと考えられる。

Suneerat et al.(2015)では、高等教育機関の日本人とタイ人の教師間コミュニケーションにおいて異文化間の違いの問題が重要な問題だと指摘されている。具体的には日本人教師が必要な情報をもらえないことや理由が示されないまま仕事を頼まれることなどのような人間関係の問題と、仕事の分担がはっきりしていないことや予定通りに時間を守らないことなどのようにタイ人には計画性がないという問題があると述べている。Aさんの語りには、日本人教師がそのような異文化間における問題を意識していることがよく表われている。Aさんの語りから、ある程度継続的な関わりを通して日本人教師が自ら相手を理解し、関係を調整することで、折り合いをつけていけるようになるが、理想の協働関係を構築するには、タイ人教師側からの対等な視点での働きかけ、情報共有や意見交換の機会の提供が必要だと言える。

5.2 Bさんの語り

5.2.1 Bさんの語りの分析

① なぜ日本語教師として教える場にタイを選んだのか——タイ人夫との結婚による定住の地

Bさんは、Y大学で働く日本語教師であり、教師経験は10年である。ご主人はタイ人で、ご主人とは日本で知り合った。結婚でタイに移動し、出産後に日本で日本語教師の養成講座を受講し、タイに戻って、現在の大学に勤務し始めた。

【中略】まあ、夫の勧めもあって、あと子育てにも役立つかなと思って、それで日本語講師の養成講座…ちょうど夫が、2年ぐらい仕事で日本に住む期間があったので、そのときに日本語教師養成講座に通って、試験とかも受けて、それで戻ってきて。まあ、下の子供が2歳ぐらいだったかな？それでまあ、幼稚園に預けられる年齢になったので働き始めようと思って2011年に…

② タイ人教師と仕事をするにどんなイメージを持っていたか——期待も不安もない真っ白なイメージ

Bさんは、Aさんと同じ、日本語教師として初めての実践の場がタイであった。最初の頃は先入観がなく、職場が日本語を話せる環境ということに感謝の気持ちを抱いている。

(特に、タイ人と一緒に仕事をするという気持ちは)なかったですね。職場のタイ人の先生はみんな日本語で話してくれるので、言語的にもそんな大変なことはなかったです。

タイ語話せるんですけど…夫とは日本語で話してて。実はそんな込み入った会話はできないんですね。だから、仕事でタイ人の先生が日本語で話してくれるのはすごくありがたいです。

③ 最初の頃のタイ人教師との関わり——授業やクラス運営に関しての主導はタイ人教師

Y大学の授業は、タイ人教師と日本人教師のチーム・ティーチングが基本の形態である。Bさんは、10年という長い期間、タイ人教師とチーム・ティーチングを行ってきた。最初の頃はそれまで日本語教師の経験がほとんどなかったため、タイ人教師の言われる通りにすることが多かった。また

クラス運営が不慣れだったため、問題解決のためにはタイ人教師の協力を仰がなければならない場面も多かった。

そうですね。ほとんど経験なく入ったので。入る前は、どんなものか全く先入観も知識もなく、入ってから「このように仕事してください」って言われて「わかりました」っていう風に始めたので、あまり疑問とか思わずに、ペアティーチング自体は…

入ったばかりのころって、タイ人の先生に頼らないとやっていけない場面が私が多かったので、そういう意味でタイ人の先生と密にコミュニケーション取らないといけない場面が多かったからよく話してたのかな。

あの、学生に問題があるようなときですね、なかなか授業に来ない子をどうやって授業に来させるかとか、授業中に勝手に部屋を出ちゃう子とか、問題行動のある子をどうしたらいいとか、やっぱりタイ人の先生の協力なしには立ちいかないような、そんな悩みとかが働いて、最初の数年はあったから、すごくタイ人の先生に頼ったり、学生と話すときにちよつと通訳してもらえますかとか。

④ タイ人教師との関わり合いの変化——互恵的な関係が築ける機会の減少から感じる寂しさ

Bさんは、チーム・ティーチングにおけるタイ人教師との関わり合い方を比較したときに、現在と以前の授業の進め方が、変わってきていると言う。それは、しばらく教師の経験を積み重ねて、タイ人教師の指示通りにするという形から自分の意見を言うようになったところだ。ペアの教師同士でも、やりたいことが違えばぶつかることもある。Bさんにとっては、たとえ衝突があってもそのことでお互いから学ぶことが多かったと言う。

そうですね。衝突することもあったけれども、それぞれの先生の教え方、タイ人の先生の教え方が理解できたり、そこから学ぶことも多かったので

その後、徐々に自分で解決できるようになり、頼らなくなってくると同時に、タイ人教師とのコミュニケーションも減ってきた。ペアになる相手によって話しやすかったり、そうでなかったりすることがある。また、大学側による指導内容の統一化や物理的な距離の変化による影響とともにタイ人教師との関係も変化した。

だんだん、自分のやりたいようにできなくなっているので、そもそもそんなにこう、「私はこういうふうに教えたい」とか、ぶつからなくもなってきているというか、もう決められた通りに教えてくださいって、もうスケジュール通りで教えてくださいっていうんで、勝手な練習を入れて遅れたりとか、もうみんなしないようになってるし(笑)前はそういうことは頻繁にあったんですけど、だから教え方も、こういうふうに教えようとか、ペアの先生でぶつかることもどんどん減ってるかなあ【中略】全然、会話しない先生もいます。(笑)

そうですね。話しやすさもあるんですが、なんかあまり、会わないっていうのもあるかもしれないですね。今、部屋が2部屋に分かれていて、違う部屋にいる先生が、わざわざ別の部屋に行かなくてはならなくて、行ったらその先生いなかったりとか…。ずーっと大学にいる先生とは、行って話せるんですけど、先生によって授業のときしか来ない先生もいたりするので、そういう先生とは、そうですね、なかなか会えないから、直接コミュニケーションする機会が減っちゃうっていうのはあるんですよね。

タイ人教師とのコミュニケーションが減ってきたことに、Bさんは寂しさを感じ、もっと授業でタイ人教師とつながりたいという気持ちが出てきていると言う。Bさんにとっては、問題が多かったり授業の進め方の自由度が高かった以前のほうがコミュニケーションという意味では充実していたと言える。

あー、私は前のほうがね、よかったんですけど、でもまあ(笑)

今の状態は。だから、ただ、もし困ったことがあったら頼れるっていう気持ちはあるので、そんなに不安はないですけど、ただ、前はいろいろ問題があったぶん、学生のことをタイ人の先生と話してて、それがちょっと、最近は先生によっては、減ってるのがね(笑) もう少し、話せたらいいなって…その、しっかり二人で教えてるときに。ただ、教え方とかも、決められたことをやってくださいってことになっちゃってるから、話し合わなきゃいけない場面もどんどん減ってきてるんです。ペアの先生と。必要がね、なくなってきちゃってるっていうか…

⑤ 理想のチーム・ティーチング——コミュニケーションを取ることによって楽しいチーム・ティーチングができる

Bさんは、理想のチーム・ティーチングとして、以前タイ人教師と一緒に担当していた選択科目の会話のクラスを挙げ、その理由として、必修科目よりはるかにお互いの関わりが深くなること、そのことでタイ人教師も意見や教え方などのアイデアを出してくれることがあるからだと言う。そこにBさんは、元学習者であるタイ人教師の体験から生まれるもの、そこにある豊かなものを感じ取っている。

選択科目で、私とタイ人の先生二人だけになると、すぐ自分のしたいこと、こういう風に教えたいとか、宿題やクイズも二人で一緒に作らないといけないので、タイ人の先生とも必修科目を教えるときよりずっと関わらなければならぬので、そのぶんいっぱい意見を言ったりしてくれるので、それがなんか自分の学びになる。あ、こういう教え方も、おもしろいとか…タイ人の先生がこうやって教えたいなっていうのは、タイ人の先生はもともと日本語学習者であるわけだから

「楽しい」の一言に、このときのBさんとタイ人教師の互いにアイデアを出し合いながら、新しいものを作っていく喜びが読み取れる。

楽しいですよ。こうしたいっていろいろ言ってくれる。「じゃあ、こういう風にやってみようか」って話し合いながらいろいろできて、自分たちで授業作っていくというのは、

タイ人の先生とのチームのほうがもっと違った視点の意見をもらえるので、日本人の先生はちょっと似てるところがあるので、広がりかね、もちろん一人でやるよりはいいんですけど、タイ人の先生はもっと見てるところがちがうところからの視点とか、アイデアとかもらえるので

Bさんは、タイ人教師のアイデアは、日本人とは違う視点から生まれるものだと言う。ここに、互いのリソースの違いを認め合い、活かすことに意味を見出していることがわかる。

5.2.2 Bさんの語りからの考察

タイ人男性との結婚によりタイに移動し、日本語教師になったBさんは、Y大学で働き始めた最初

のころは、慣れないため授業のことよりクラス運営に関する事でタイ人教師の協力を仰ぐことが多かった。その後、チーム・ティーチングをやっている中で授業のやり方を巡って衝突することもあったが、得るものもあった。しかし、最近では大学の方針などにより授業で創造的な試みができなくなったため、タイ人教師とのコミュニケーションの機会が減少した。そのことにBさんは寂しさを感じている。Bさんにとって、タイ人教師とのチーム・ティーチングの意味は、異文化を背景に持つ者同士が一緒に授業を作ることであり、その過程での双方向での意見交換やアイデアの提示である。Bさんはそこに楽しさを感じた。それは現在担当している授業では不可能な試みであり、可能ならばぜひやりたい実践である。お互いのやりとりの中から新しいものが生まれる創造の喜びを実感したからこそ言えるのであろう。そのプロセスで衝突があったとしてもお互いから学べることに意味を見出す互恵的な関係性が、Bさんの望むチーム・ティーチングのあり方であると言えよう。授業や活動を固定化せず、常に意見交換し、柔軟に対応していくことが、Bさんの言う「楽しさ」であり、理想的な協働だと考えられる。また、Bさんは、同じ日本人教師同士よりタイ人教師に視点の違いを実感している。それは、異文化による視点の違いによるものだけでなく、タイ人教師ならではの経験からの視点の違いに言及していることからわかる。かつて学習者であった自分という視点を常に持つタイ人教師からの意見や提案に対し、母語話者教師であるBさんは新鮮さを感じると同時にそれらを尊重していると捉えられる。

タイ人教師は協働の結果を重視するのに対して、日本人教師は協働の過程に着目する傾向にあると、池谷他(2012)に指摘されている。本研究はそれを支持する結果となった。しかしながら、調査対象者は同様にタイ高等教育機関の日本人教師であったため、これは異文化による違いなのか、

高等教育という職場の特徴と関係があるのか、さらに比較を行う研究をする必要がある。「大学等における「教職協働」の先進的事例に係る調査」報告書(2018)によると、高等教育機関の教師は「組織」より「個」を重視して動く傾向があると述べられている。タイも同様に、大学の場合、タイ人教師にとって日本人とコミュニケーションを取ることより研究など授業担当以外のことに時間をかけたい、よって、タイ人教師は楽しい協働より効率性を優先する可能性も考えられる。

5.3 Cさんの語り

5.3.1 Cさんの語りの分析

① なぜ日本語教師として教える場にタイを選んだのか——実習のときの現地関係者に対する感動と感謝

Cさんは、Z大学で働いており、現在9年目である。大学で日本語教育を専攻し、在学中に1か月間、チェンライの大学で教育実習を経験した。その時の職場環境や人間関係が心に強く残り、卒業後の進路を英語教師から日本語教師に変えた。Cさんにとって、1か月間の実習は人生のターニングポイントとなった。当時の担当教員の紹介で、大学卒業後すぐに現在の勤め先であるZ大学で教え始めた。

自分が日本語教育専攻で、大学で勉強していて、大学3年生のときに実習でタイに来て、【中略】そのときの思い出がすごくキラキラした思い出だったので

実際に授業をやってみるとのことと、あとやっぱり異国での生活ですかね。話せば話すほど恥ずかしくなるんですけど(笑)そんなに強い信念をもって(タイに)来たのかというところでもないところがあって。ただそ

のとき、1か月の実習で、先生にもお世話になって、学生にもちやほやされたので(笑)ちやほやされたので

② タイ人教師と一緒に仕事をするにどんなイメージを持っていたか——心を占めていたのはタイ人へのイメージより自分の業務遂行能力への懷疑

Cさんは、実習のときの「キラキラした」思い出から、タイで日本語教師になることを選んだのだが、実際のタイへの移動を前にすると、仕事への責任の重さと教師経験のない自分の能力への懷疑心が、Cさんの心の中を占めるようになった。就職で新しい環境を前にすると誰しもが抱く心情であることは察せられるが、Cさんの場合は、この期間が「キラキラした」思い出から現実の厳しさを実感するまでの精神的な移行期間であり準備期間と考えることができよう。

人間関係より、本当に私はできるのかのところが心配でした。根本的に、私は日本語教師としてやっていけるのかっていう…この大学で教えることが決まるときまでは、かえって働きたいって気持ちが強かったんですが、いざタイに来るっていうときになると、私は実際に大学生に日本語を教えることができるのかなっていう、はい。しかも、自分も卒業してすぐだったので、

③ 最初の頃のタイ人教師との関わり——自分から働きかけることなく不安なまま過ごした1年

CさんがZ大学で最初に担当した科目は、総合日本語に近い内容の科目と通訳、観光だった。すべてタイ人教師と日本人教師が担当しており、総合日本語と観光の科目ではCさんは会話の部分を担当していた。

来て、特に1年目は不安のまま過ごしました。

総合日本語の授業は、完全な役割分担の形であり、連携が弱かった。観光の授業も役割分担の形だったが、通訳の授業は、同じ時間にタイ人教師も一緒に教室に入るという違う形だった。最初、ほとんどの授業はタイ人教師に言われる通りに行った。

通訳の授業も観光の授業も、最初はタイ人の先生が言っていたことをそのまま私は受け入れてやっていたようなイメージがあるんですけど。通訳の授業も、今までの日本人の先生もこんな風に授業をやったから、先生もこういうふうにやってくださいねっていう雰囲気…。【中略】、けっこう受け身の態勢で授業に参加してたんですけど、観光の授業も、そうですね。

④ タイ人教師との関わり合いの変化——授業内外で築かれるタイ人教師との関係性

Cさんは授業内の関係と授業外の関係といった2つの側面から変化について語ってくれた。まず、授業内に関しては、通訳授業の担当教師との変化について言及した。同じ時間にタイ人教師と一緒に指導する通訳の授業だが、1年目はCさんの態度は受け身であった。しかし、年数が経つにつれ、徐々にCさんのほうからも意見や提案を言えるようになり、主体的に関わるようになっていった。

いつからか覚えてないんですけど、授業を改善するきっかけがあったときに、もっと私が意見を言うようになってきた気がします。【中略】(自分が来る以前から)ずっと同じスタイルでやってたんだらうなって思います。ただ、学生の人数が増え

たことでちょっとやり方をどうにかしないとってなったときに、今までのやり方だと、学生が授業の中でフィードバックする時間が取れないんですよ。【中略】それをタイ人の先生に提案して…

タイ人教師は肯定的にCさんの意見を受け止め、以来、Cさんとタイ人教師は互いに分担、連携しながら授業を進めていった。

通訳を一緒に教えてるタイ人の先生はけっこう新しいことが好きな先生なので、本当に何でも受け入れてくれるような、これおもしろいと思ったら受け入れてくれるような先生だったので、「じゃあ、今年そうやってみましょうね」って本当に、新学期が始まったばかりの時に提案したんですけど、それを受け入れてやってくれましたね。

私は実践のフィードバック担当で先生はそういう練習の内容を考える担当っていう新しいやり方を作って、それで現在に至りますね。

はっきりとした役割分担ではなく、一緒に授業を作っていくうえで、それぞれの内容を考えたときの分担であり、そこには必ず授業での共有があった。しかし、順調に進みそうなチーム・ティーチングだったが、お互いの相手への理解不足からの誤解もあった。

ちょうど同僚の先生が博士論文を書いていて忙しかったんですよ。で、私も言った手前、じゃあ、フィードバックは私が担当するって言って、毎週毎週授業で録音したりして、私が聞き取れなかったタイ語を一生懸命聞き直したり、そういうことをやってたんですけどあのときはちょっとしんどかったですね。

もうちょっと先生手伝ってくれたらいいのっていう、何ですかね、被害妄想ですか？
(笑) ちょっとそのときは被害妄想があったりしたんです。

相手の気持ちが理解できず、自分で言ったからにはという責任感から1人で仕事を背負いこんでいたCさんだったが、それがタイ人教師を驚かせた。その時になって初めてCさんは相手に何も言わずに一人で思い込んでいただけであって、相手のことを理解していなかったことがわかった。

それをやってたら同僚の先生がなんで私に相談してくれなかったのって驚いてたんですよ。怒ってたんじゃない。「え、こんなことまで一人でやったの？」みたいな。「タイ語のことだったら、私が」って。

次に、授業外のタイ人教師との関係について、1年目の終わりぐらいからタイ人教師との関係性に徐々に変化が表れるようになった。

他の先生との関係性だったら、けっこう1年目の終わりぐらいから、タイ人の先生とは仲よくなっていたような気がします。

Cさんとタイ人教師の関係は、一緒に昼ご飯を食べるといって授業外の関係から始まり、授業に関することに広がっていく。

あまり覚えてないですけど、(授業はどうかとかもう慣れたかとか) そういうところからちょっとずつ仲よくなってきたと思います。あと、タイ人の先生の授業のお手伝いとかは行っていたような気がしますね。翻訳の授業の手伝いとか。

Cさんは、語りの中でタイ人教師たちとの関係性のよさを何度もくり返し強調する。

(タイ人教師は) ほんわかしてますし、生活面でも授業のことでも、困ったことをちょっと言ったら必ず何かしてくれるって安心感もありましたね。

仲がいいというのは、タイ人日本人合わせて日本語の教員全員が同じ部屋で仕事しているという物理的な環境によるところも大きいようだ。

はい。9人の先生がみな同じ部屋にいます。(笑) 丸見えです、本当。他の先生が何をしているかって、後ろ歩いたら仕事してるかどうか見えちゃうぐらい丸見えです。【中略】お菓子も一緒に食べてます。【中略】カタカタ、私が一生懸命仕事しているときとかも、もちろんあるんですけど、そういうときは机にポンと置いてくれたりとか。本当に本当にいい先生たちですよ。

飲食に関することだけではない。タイ人教師がCさんに翻訳の授業の手伝いを依頼していると述べたが、Cさんも、大学外で、ある活動をしており、そこで行われるイベントのチラシの翻訳もタイ人教師に依頼している。

いくつかの【中略】発表の紹介内容の翻訳依頼がありましたよね。あのときは、3、4人の先生に分担してお願いをしたりしました。【中略】本当に親切な方々です。

Cさんは、タイ人教師たちの厚意に対して自分はどう応えるかについても言及する。

いつも恩恵を受ける立場ばかりなのはよくないなって思っています。なので、機会があれば、機会があればというか、今もできるだけ頑張ってるんですけど、私も力になれるようになっていうのを意識しています。何かお願いを受けたら、絶対、その本当に無理じゃないとき以外は断らないようにしようと思ってます。

Cさんの授業内外でのタイ人教師と共に過ごす時間と具体的な関わり方の語りから、タイ人教師との良好な関係性が築かれてきたことがわかる。

- ⑤ 理想のチーム・ティーチング——通訳の授業における深い信頼関係から生まれる協働の実現
通訳の授業の誤解事件は、その後のチーム・ティーチングにおける互いの関係性をより深めることとなった。

私も「こういうことをお願いしてもいいですか」っていうのをちゃんと言うようにして【中略】授業の当日の朝に、2人で授業で使うスライドを一緒に確認して、この部分はタイ語で説明したほうが学生にとっていいと思うところがあったら、その先生に「スライドのところ、先生お願いします」っていう風に…。けっこう、そうですね、授業当日に私、そういうことを言っちゃうので、もし私がタイ人の先生の立場だったら、なぜ急にこんなことを言うんだろって思うんですけど、けっこうその先生、本当にマイペンライって感じの先生なので「はい、わかりました。ここですね。」って感じで、しかも、授業の中で、ちゃんと私がお願いしたかったようにやってくれたり。はい。

そして、9年の月日が経つうちに、すべて言わなくても互いに言いたいことが伝わるようになってきたと言う。

かれこれ9年、ずっと同じ、一緒にやってるんですね。通訳の授業。なので、細かいところ、お互いに言わないところがあります。言わなくても「あーこれか」っていう風に

あの、通訳の授業がいちばんチーム・ティーチングしてるって感じがするんですけど。(成績の配分も)一緒に考えたり、試験の採点も一緒にしたり…はい、全部一緒にやってる気がします。

Cさんにとっては、役割分担ではなく、授業に関するすべての作業を共に行っているこのタイ人教師との通訳の授業こそが理想のチーム・ティーチングであり、協働で授業を作っていると言えるのではないだろうか。一時は互いの異なりが理解できなかつたことから、被害妄想に陥ったCさんだが、異なりが明らかになりそのことを認識したうえで、改善のための努力を惜しまなかつたことが協働の実現につながったと考えられよう。

5.3.2 Cさんの語りからの考察

大学を終了後、日本語教師という職業を選び、働く場所としてタイという国を選び、Z大学という教育機関を選んだCさんは、これまでの9年間の教師生活を振り返る中で、自分の行う授業については試行錯誤しながら取り組んでいる感じが感じられたが、タイ人教師との関係性においては具体的なエピソードとともに語られるのは感謝の言葉であった。Cさんの語りにおける重要な部分は、Cさんを取り巻く周囲との関係性が非常に良好なことにあると考える。Cさんは、Z大学の開放的な職場環境と親和的なタイ人教師との良好な関係性に、Z大学で働いている意味を見出している。通訳のチーム・ティーチングでは、一時的な誤解はあったものの却ってそれが信頼関係を強固なものにし、協働の実現につながった。チーム・ティーチングの相

手だけではなく同じ職場にいるすべてのタイ人教師について「本当にいい人たち」と何度も繰り返し、タイ人教師の厚意に報いられるよう頑張りたいと語るCさんは、今の職場環境で働くことに「幸せ」を感じていると言えよう。自分の働く職場に幸せを感じられるということは、それを選択した自分への信頼と自信をもたらすことにもつながりはしないだろうか。

個々人によってそれぞれ状況が違っても、教師自身、協働相手、そして職場環境という要素が上手く機能することによって理想的で充実した協働を現実化できると言える。日本人教師の異文化による違いへの気づきと理解だけでなく、協働のパートナーのタイ人教師側からも、お互いに十分なコミュニケーションの機会の提供と理解し合う心のゆとりが欠かせない。2、3人の少人数で行う実践の場合は、本人と相手という2つの要素が完璧な調和ができれば十分な良い協働が生み出される。しかし、Cさんの事例のように、さらにより良い協働を実現する場合、その協働実践を囲んでいる恵まれた職場環境の整備も大事な要素として関わってくるのが考えられる。

6. おわりに

本研究は日本から来タイし、タイの大学でタイ人と一緒に日本語の授業を担当している日本人教師を調査の対象とした。なぜタイという国を選び、タイ人教師とどのような形態で教えているのか、どのような連携の元で授業が行われているのか、教え続ける中でどのような変化があったのかに焦点を当てながら、調査協力者のこれまでの実践の振り返りの語りを通してタイ人との関わり合いにおける意識の変容を分析した。現地での教育経歴の長さによる協働上の仕事観など段階的な変容(中山, 2016)を確認することができ、互いのリソースの豊かさに気づき、協働が実現できている事例と、日本人教師側もタイ人教師側も関わり合い方を工夫すればよりよい協働関係が築ける事

例の実態を提示することができた。また、ナラティブ分析という分析方法を用いたことで、海外で日本語教育に携わる日本人教師ならば、3人の語りのどこかに自分を投影し、そこから改めて自分の実践やチーム・ティーチングの相手との関係性を見直し、協働について考えるきっかけになるのではないだろうか。個々の教師が向き合う教育現場は様々であり、起こる問題や衝突も様々である。しかし、問題や衝突を乗り越えるプロセスの中で、それらが異文化に対する不理解や相手の背景に対する知識の欠如から来るものであることを自覚化することで、協働ができる関係を築くことができると考えられる。そして、このことは教育現場だけではなく、他の職場においても言えるのではないだろうか。本研究の協力者3人の語りが、協働の生まれる職場環境づくりにも寄与できるだろう。

本研究ではタイ人教師側の日本人教師に対する意識の変容について確認できなかった。大学のタイ人日本語教師の場合、長年日本への留学経験のあるタイ人教師が多く、それらの人の日本滞在中日本人との接触量が少なくない。しかし、留学場面と仕事にまつわる場面とは人との関わり方が違い、仕事場面になると現地のタイ人教師にとっても異文化の仕事スタイルや価値観の違いを受け止める必要がある。タイ人教師が日本人教師との協働をどのように捉えたのか、実際はどのように反応して対応したかについて分析することが今後の課題である。

注

- (1) ティーム・ティーチングの定義については諸説あるが、大きく分けると二つの捉え方があると考えられる。一つは「同じ教室にメインで教える教師とサブの役割を担う教師とが一緒に入る」(中山, 2016, pp.76-77)ことであり、もう一つは「授業には一緒に入るのではなく、週2回の曜日で分け、交互に教える形」(サラン

ヤー・吉田, 2012, pp.130-131)である。筆者らはその二つの捉え方を考慮した上で、本研究では「複数の教師が同じ科目で同じ学生を担当し、その機関や学習目標に合ったさまざまな方法で協力し合って働くこと」と定義した。

- (2) PAC分析(Personal Attitude Construct Analysis)は調査協力者に特定のテーマに関して自由に述べてもらってそれに基づいてその人の態度やイメージの構造を分析するという心理学分野の研究手法である。
- (3) SCAT(Steps for Coding and Theorization)はインタビューから得られた発話データの中の注目したい語句を取り上げて4つのステップで簡単な分かりやすいテーマや概念にコーディングする手法である。
- (4) ナラティブ(Narrative)研究の認識論や方法論の相違によって、従来の先行研究のナラティブへのアプローチには、大きく分けて、ナラティブ・テキストに着目する構造的・機能的アプローチ(Labov, 1972)と、語り手と聞き手の相互行為を重視する対話的・構築主義的アプローチ(Ochs & Capps, 2001)がある。
- (5) 本研究では、ティーム・ティーチングは教師が協働の具体的かつ密接な関係の機会と見なし、教師同士の授業を核とした協働、授業外の他の形の協働をすべて「協働」として捉える。

参考文献

池谷清美・Kanokwan Laohaburanakit Kati-giri・片桐準(2012)「タイ国高等教育機関におけるタイ人教師と日本人教師の協働観の比較—PAC 分析からの考察—」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』9, 29-38.

池田玲子・館岡洋子(2007)『ピア・ラーニング入門—創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房

香月裕介(2011)「タイ人教師と日本人教師の役割分担から生まれる「つながる」動き—タイ国R大学日本語学科を例に—」『国際交流基金バンコク日本文化センター 日本語教育紀要』8, 45-54.

香月裕介, 松尾憲暁(2017)「タイ人日本語教師と日本人日本語教師との協働に関わる三つの要因—日本人日本語教師の不快な経験の分析から—」『神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学会紀要』2, 31-43.

カノックワン ラオハブラナキット 片桐・池谷清美・片桐準二(2016)「タイ人教師のコミュニケーションの仕方に出会った日本人教師の工夫とその過程—タイの大学の日本人教師のインタビューデータから—」『Japanese Studies Journal』33, 17-31.

佐久間勝彦(1999)「海外で教える日本人日本語教師をめぐる現状と課題—タイでの聞き取り調査を中心に—」『「世界の日本語教育」日本語教育事情報告編』5, 79-107.国際交流基金日本語国際センター

サランヤー コンジット・吉田直子(2012)「ティーム・ティーチングにおけるネイティブ教師とノンネイティブ教師の役割分担：チェンマイ大学初級日本語クラスのタイ人学習者の期待」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』9, 129-137.

嶋津百代(2018)「日本語教育・教師教育において「語ること」の意味と意義対話にナラティブの可能性を求めて」『言語文化教育研究』16, 55-62.

館岡洋子(2005)『ひとりで読むことからピア・ラーニングへ—日本語学習者の読解過程と対話的協働学習』東海大学出版会

- 平畑奈美(2014)『「ネイティブ」とよばれる日本語教師—海外で教える母語話者日本語教師の資質を問う』春風社
- (2019)『移動する女性たち—海外の日本語教育と国際ボランティアの周辺』春風社
- 古別府ひづる(2008)「タイ中等教育機関におけるタイ人日本語教師の良き日本語教師観—PAC 分析と半構造化面接より—」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』5, 37-46.
- (2013)「タイ高等教育機関におけるタイ人日本語教師の良き日本語教師観—PAC分析と半構造化面接より—」『大学日本語教員養成課程研究協議会論集』8, 25-31.
- 中山栄治(2016)「タイにおける日本語教師間の協働モデルの再構築—日本語母語話者教師へのインタビュー調査に基づいて—」『大阪産業大学論集人文・社会科学編』28, 75-91.
- 中山英治・門脇薫・高橋雅子(2017)「理想的な教師間協働を経験している教師の語り—SCATによる構成概念と理論仮説—」『日本語教育実践研究』5, 64-74.
- 矢崎千華(2016)「ナラティブ分析を再考する—構造への注目—」『関西学院大学社会学部紀要』125, 47-57.
- 吉田一彦・芝崎理恵(2009)「母語話者教師と現地教師との協働モデル構築に向けて—モンゴルでできること、タイとの比較—」『アジアの日本語教育:「外国語としての日本語」修士課程一周年セミナー論文集』89-102.
- Labov, William. (1972). *Language in the inner City*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Ochs, Elinor & Capps, Lisa. (2001). *Living narrative: Creating lives in everyday storytelling*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Suneerat Neancharoensuk, Noppawan Boonsom, Soysuda Na Ranong. (2015). The problems of Japanese teachers when communicating with Thai teachers: An analysis of the problems caused by cultural differences. *Japanese Studies Journal*, 32(2), 137-147. (In Thai)

Received: 15/4/2021

Revised: 7/6/2021

Accepted: 10/6/2021